

災害伝承と防災教育 (2)

—静岡市の妖怪伝承を活用した防災紙芝居・ワークショップの開発と評価—

小川日南 藤井基貴

(テレビ愛媛) (静岡大学大学院教育学領域)

Disaster Lore and Disaster Prevention Education (2)

Development and Evaluation of Disaster-Prevention Kamishibai and Workshops

Utilizing Yokai Folklore from Shizuoka City

OGAWA Hina, FUJII Motoki

Abstract

This study aims to propose a framework for developing and evaluating educational materials that connect locally transmitted yokai and folktale traditions with contemporary disaster-prevention education. While recent advances in disaster history research and the institutional visualization of disaster memory—such as the public release of Natural Disaster Tradition Monuments by the Geospatial Information Authority of Japan—have strengthened the preservation of disaster-related knowledge, repeated damage continues to occur in some regions where such traditions exist but are not effectively used as lessons. This indicates the importance of not only preserving information but also *recontextualizing it educationally* so that it leads to learners' understanding and action. In particular, intangible, community-based oral traditions, including folktales and yokai narratives, have historically conveyed disaster risks symbolically and supported everyday risk awareness and norm formation, yet their systematic use in disaster education remains limited.

キーワード：災害伝承 妖怪 防災教育 紙芝居

1. はじめに

日本列島の歴史は、地震・津波・洪水・土砂災害・火山災害といった自然災害と不可分の関係にある。これらの災害は、単に物理的被害をもたらしてきただけでなく、人々の生活様式や地域社会の規範、信仰、さらには記憶の継承のあり方にまで深く影響を及ぼしてきた。近代以降、自然科学および工学の発展により、災害現象の解明や防災・減災対策は大きく前進してきたが、同時に近年では災害史研究の進展を背景として、文献史料に加え、絵画、石碑、遺構、口承伝承といった多様な媒体が、災害理解の重要な資源として再評価されつつある。とりわけ2018年以降、国土地理院が自然災害伝承碑の情報を地理院地図等で公開し、過去の災害の教訓を空間情報として参照可能にする枠組みを整備してきたことは、災害の記憶を社会的に共有する基盤の整備として注目される(千田他, 2023)。

しかしながら、災害の記憶が地域に「存在する」ことと、その教訓が人々の判断や行動として「活用される」ことの間には、なお大きな隔たりが存在する。各地に伝承碑が残されているながらも被害が反復されてきた歴史が示すように、記憶の保存それ自体が自動的に学習や防災行動へと結びつくわけではない。したがって、災害伝承を防災教育に活用するためには、過去の災害の痕跡や伝承を掘り起こす作業にとどまらず、それらを現代の学習者が理解し、判断し、行動へとつなげることができる形へと再編成する教育的実装、すな

わち教材化・授業化の方法論が不可欠となる。

本研究が焦点を当てるのは、石碑や公文書といった文字・物質媒体のみでは把握しきれない、地域に口承されてきた民話や妖怪譚を含む無形の災害伝承である。柳田國男が無形文化としての「伝承」に着目し、人々の日常生活に埋め込まれた知恵や価値を掘り起こした方法論は、防災・減災研究にも接続され、近年では民話や伝説から当時の防災意識を読み解こうとする「自然災害の民俗学的研究」が広がりを見せている(野本, 2013 畑中, 2017 他)。この研究潮流において重要なのは、伝承を単なる昔話として鑑賞するのではなく、日常生活のなかで形成されてきたリスク認知や規範意識、行動準備を媒介する装置として読み替える視点である。

こうした問題意識に基づき、本論文に先立つ検討として前稿(小川・藤井, 2024)では、静岡市に伝わる民話「沼のばあさん」を対象として分析を行った。同論文においては、①魔物退治から沼の平穏・恵み(法器草)という物語構造に、人々の不安や恐怖の心象風景を読み取りうること、②静岡市麻機地区において沼地が子どもの遊び場であった歴史的な脈を踏まえ、水難事故への警鐘としての啓発機能を有していること、③浅畑沼が土地改良によって水田化され、さらに1974年の七夕豪雨を契機として遊水地整備へと転換していく治水史のなかで、同民話が地域の治水・水難・環境をめぐる語りを媒介する「共鳴板」としても機能を有

してきたことを指摘した。また同論文では、静岡県における災害伝承を網羅的に検討したうえで、その機能的特性に着目し、「警告を発するハザード機能」と「安全を伝えるセーフティ機能」という二つの類型に区分して整理した。あわせて、全国的に沼に関する伝承には、自然災害への警鐘としての役割にとどまらず、水難事故予防を促す啓発機能が認められることを指摘した。

本論文は、これらの知見を踏まえた続編として位置づけられるものである。静岡市に伝承されてきた複数の妖怪譚（河童・大蛇／龍・鯰・鬼等）を素材として、防災を主題とする新たな物語を創出し、それを紙芝居としてデザイン・制作するとともに、学校や社会教育施設等での活用を想定した展示やワークショップを企画した。さらに、図書館における実践を通して、その過程と成果を検討し、課題の抽出と改善を図った。以上の取り組みを通じて、無形の災害伝承を用いた教育的アプローチが、学習者の災害理解やリスク認知にいかなる影響を与えるのかを考察し、その教育的効果と可能性を検討している。なお、千々石・矢守（2020）が的確に指摘しているように、防災教育に関する実践においてプレ・ポスト調査による効果測定を行うことは、実践の一定の成果を把握するうえで意義を有するものの、それ自体が中・長期的な視野に立った防災・減災の取組の基盤形成に直結するとは限らない。むしろ、こうした評価は、実践のどの点に課題があり、今後どのような改善が求められるのかを明らかにするための手がかりを提供する点にこそ重要な意義があるといえる。そのため本論文においても、効果測定を実践の成否を断定するためではなく、課題を析出し、今後の改善可能性を検討するための資料として位置づける。

2. 災害伝承の教材活用をめぐる現状と可能性

2.1. 災害伝承と防災教育

災害対策基本法の2012年改正においては、過去の災害から得られた教訓の伝承等を通じて防災に寄与することが努力義務として明記され、災害の教訓を次世代へ継承する営みの重要性が制度的にも位置づけられた。これと連動する形で、国土地理院は全国の自然災害伝承碑を調査・整理し、その情報は地理院地図等を通じて公開が進められている。

自然災害伝承碑は、発生日月、災害種別、被害規模、さらには後世への教訓を恒久的な構築物に刻むことによって、地域の災害記憶を空間的に定着させようとする機能を持つ。このような可視化は、災害史を特定の「場所」と結びつけて参照可能にする点において、大きな意義を有している。また、総務省消防庁が整備したデータベース「全国災害伝承情報」では、全国各地の災害とそれに付随する「言い伝え」が体系的に整理され、「地震の時は竹やぶに逃げろ」や「津波でん

でんこ」といった表現が、地域、趣旨、出典とともに提示されている。

これらのアーカイブ整備は、災害伝承へのアクセス可能性を高めるとともに、防災教育における教材的資源を大きく拡充するものと評価される。しかしながら、その一方で、学校教育の現場においては、こうした資料が必ずしも十分に活用されているとは言い難い状況がある。とりわけ、防災教育に限らず、テーマに関する情報や資料が蓄積されるほど、学習者の発達段階や地域的条件に応じて、「何を、どの順序で、どの媒体を用いて扱うのか」という授業構成やカリキュラム設計の検討は複雑化・高度化する。その結果、新たに整備された資料や知見が、学校における教育実践へと十分に接続されないままにとどまる事例が生じやすいことも、併せて指摘しておかなければならない。

また、従来の学校における防災教育においては、避難訓練をはじめとする実践的訓練が、その中核を担ってきた。避難訓練は、防災教育の基盤を成す重要な要素である一方で、その内容が必ずしも地域の特性や過去の災害史を十分に反映したものとなっていない点については、繰り返し課題として指摘されてきた（文部科学省，2011；2012；野本，2013）。このような状況下では、学習が避難行動の手順を反復的に習得することにとどまりやすく、災害を日常生活の延長線上に存在するリスクとして捉え、状況に応じて判断し続ける力を育成する包括的な学習へと結びつきにくい。

この点に関して、地域特性を「地形・地質等の物理的特性」に限定するのではなく、地域に蓄積されてきた社会的・文化的文脈を含むものとして捉え直すことが重要となる。こうした視点に立つことで、子どもを含む多様な主体が関心を持ち、自発的に学習へ参加する契機を創出することが可能となるだろう。妖怪伝承の活用は、この課題に応答する一つの方策として位置づけられる。すなわち、第一に、妖怪という親しみやすい象徴を媒介とすることで学習動機の形成を促し、第二に、妖怪が現れる「場所」や「行為」に着目することを通して、地域の環境的特性や潜在的なリスクを読み解かせるという二つの要件を同時に満たしうる点に、その教育的意義が見いだされる。

2.2. 妖怪伝承の活用可能性と留意点

妖怪は、説明しきれない自然現象や危険を人格化し、共有可能なイメージとして社会に定着させる機能を有してきた。この点に鑑みれば、妖怪伝承を防災教育に導入する意義は、恐怖を過度に喚起することによる脅しにあるのではなく、象徴を介して注意の向け先を示し、語り合いを促す契機を形成する点に求められる。近年、妖怪を含む災害伝承と防災教育を接続しようとする研究や実践も一定の広がりを見せているが、伝承は時代や語り手の変化に伴って変容し、原初の文脈が

失われたり、別の意味へと転化したりすることが少なくない。その結果、史実性やリスクの根拠が不明確なまま、「面白い昔話」として受容・消費されてしまうおそれもある。また、そもそも妖怪伝承のすべてが防災や注意喚起を直接の目的として語り継がれてきたわけではない点についても、十分な留意が必要である。

したがって、妖怪伝承を教育的に活用するにあたっては、第一に、伝承の背景にある地域の災害史や地形・環境条件を可能な限り明らかにすること、第二に、それらの伝承が示してきた意味内容と現代におけるリスク認知との接点を慎重に検討すること、第三に、そこから導き出される行動選択への示唆を、学習内容として再編成する作業が不可欠となる。

本論文では、前稿において示された民話「沼のばあさん」の分析結果（小川・藤井，2024）を踏まえ、地域に伝わる災害伝承を教材化するための理論的基盤について、あらかじめ整理・検討を行う。前稿の検討を通じて、静岡県の災害伝承は、その内容や役割に着目することで、「警告を発するハザード機能」と「安全を伝えるセーフティ機能」という二つの機能類型に区分可能であることが示された。

とりわけ、「沼のばあさん」の分析からは、自然災害への警鐘にとどまらず、水難事故予防の啓発機能を担ってきた点、麻機地区に複数の沼地が散在し、それらが子どもの遊び場として位置づけられてきた生活史との接続、さらに後年において「沼のばあさん」が沼の主（守護神）として信仰の対象へと変容していった点など、教材開発に向けた多くの示唆が得られた。

加えて、物語の舞台となった浅畑沼（大沼）は、土地改良によって水田化された後、1974年の七夕豪雨による被害を契機として、遊水地整備へと方針転換されていったという治水史を有している。この過程において、「沼のばあさん」の物語は、治水・水難・環境をめぐる「語り」を媒介する「共鳴板」として機能し、地域における合意形成や関心形成を支えてきた側面も確認された（小川・藤井，2024）。

以上を総合すると、地域の災害にまつわる妖怪伝承を教材化することは、単に「過去の教訓を伝える」という営みにとどまるものではない。危険の所在を想像可能にする点（ハザード機能）や回避や避難の方向性を示唆する点（セーフティ機能）の視点に加えて、地域の治水・防災・環境をめぐる課題を語り合うための共通言語を生成する点（ナラティブの社会的機能）^{註1}にも独自の教育的価値を備えるものである。本研究で目指すのは、これらの観点を子どもの発達段階に応じて教材化し、授業やワークショップの形式で具現化する試みである。

3. 防災紙芝居の開発

4.1 開発の経緯と設計方針

こうした問題意識に基づき、妖怪伝承を用いた教材化・授業化の検討を進めていたところ、静岡市立中央図書館および同図書館友の会より協力のご依頼を受け、2024年9月から10月にかけて、子どもを対象とした図書館イベントを企画・実施する機会を得た。イベントのテーマとしては、「ようかいから学BOSAI（まなぼうさい）—こわいも時に役にたつ—」を提案し、防災教育に関する研究室の活動展示（9月18日から11月26日まで）に加えて、展示期間中の2024年10月27日（日）には、ワークショップ「BOSAI ようかいを調査せよ！」を実施することとなった。

企画段階における複数回の打ち合わせを通して、静岡市に伝わる民話、とりわけ「沼のばあさん」を中核に据えた紙芝居の制作とワークショップを構想するに至った。そこで、前稿の研究成果を踏まえ、妖怪伝承を媒介として地域リスクを学ぶことを目的とした紙芝居教材を新たに制作するため、プロジェクトチーム（メンバー：小川日南・竹内優芽・藤井基貴）を立ち上げ、プログラム開発を進めた。なお、本研究プロジェクトでは、妖怪伝承と防災教育を横断的に結びつけ、教材開発・授業実践・学習者の認識変容を研究対象として総合的に分析する試みを「防災妖怪学」と名付けている。その射程において、本研究は妖怪という想像的・物語的存在を媒介としつつ、災害の記憶やリスクへの感受性をいかに次世代へ継承できるのかを学際的に探究する研究領域の開拓を目指すものである。

教材の中心的媒体として紙芝居を採用したのは、図書館という公共空間において読み聞かせが可能であることに加え、参加者が一つの物語を共有する「共同注意」の場を形成しやすく、導入教材として高い親和性を有していると判断したためである。このようにして、本研究では、理論的検討と実践的要請とを往還させながら、妖怪伝承を活用した防災教育プログラムの開発と実施を試みることとなった。

また、ワークショップの設計にあたっては、以下の三点を基本方針として定めた。

第一に、妖怪の位置づけである。妖怪を単に「怖がらせる存在」として扱うのではなく、地域に潜む危険を知らせ、注意を促す存在として再定義することで、恐怖喚起に依らない学習動機の形成を図る。第二に、防災に関する知恵や教訓の扱い方である。妖怪と結びつけて語られてきた洪水、地震、土砂災害等のリスクについて、子どもが理解可能な行為や判断の水準へと翻訳し、具体的な思考や行動の選択へと接続することを重視する。第三に、地域性の反映である。物語のなかに、実在する地名、河川、峠、神社等を織り込むことで、抽象的な防災知識にとどまらず、場所と結びついた学習へと展開し、地域理解の深化を促す。

これら三点を統合することによって、妖怪伝承を媒介とした防災教育が、想像力を喚起しつつ、地域に根

差したリスク理解と対話的学びを支える教育実践として成立することを目指した。

4.2 物語構造と登場伝承

紙芝居の開発にあたっては、前稿における地域調査の成果に加え、日本各地で語り継がれてきた妖怪に関する伝説・伝承・民話・神話・昔話・都市伝説を体系的に収録した『日本怪異妖怪事典』（全8巻、笠間書院）等の文献をプロジェクトチームで精読し、静岡市およびその周辺地域に関わる伝承を抽出した。そのうえで、それぞれの伝承が有する「警告を発するハザード機能」および「安全を伝えるセーフティ機能」の観点から検討を重ね、最終的に以下の伝承を基盤として、それらを関連させる形で一つの物語を構想した。

- 1) 稚児橋の河童（清水区・巴川）
- 2) 沼のばあさん（葵区・麻機地区）
- 3) 要石（清水区・鹿島神社）
- 4) 食人鬼（静岡市郊外・宇津ノ谷峠）
- 5) 正雪トンボ（静岡市）

物語は、主人公である「しずく」（7歳程度）が地域に現れる妖怪たちと出会い、対話を重ねるなかで、妖怪が単なる恐怖の対象ではなく「危険を知らせる存在」であることに気づき、自らの暮らす地域に潜む災害リスクを学んでいく成長物語として構成した。物語内には反復句として「なんか、ようかい？」を配置し、参加児童がリズムとして共有しやすい語りの構造となるよう工夫している。全体のあらすじは以下の通りである。

「なんかようかい？ぼうさい妖怪!？」のあらすじ

静岡村に暮らす小学生のしずくは、稚児橋で河童に会えるという言い伝えをきっかけに、地域に伝わる妖怪たちと出会う。河童や麻機の「沼のばあさん」との対話を通して、妖怪が人を怖がらせる存在ではなく、洪水や水難などの危険を知らせ、人々を守ってきた存在であることを知る。やがて、宇津ノ谷峠で鬼が悪さをしているという噂の真相を確かめるため、しずくは鹿島神社の要石の下に眠るなまずの協力をうけて、妖怪たちとともに現地へ向かう。鬼は落石の危険を知らせようとしていただけであり、しずくたちは注意喚起の立て札を設けることを提案する。満観峰から静岡村を見渡した一同は、妖怪たちが地域の危険を伝える存在であることに気づく。物語は、身近な地域にも防災の知恵が物語として息づいていることを示しながら締めくくられる。

本紙芝居の構想にあたっては、とりわけ「沼のばあさん」の民話に含まれる水難事故への警鐘という視点

を中核に据えている。あわせて、各妖怪の伝承地が「現在どのような場所となっているのか」を、後続の活動（なぞ解き、ハザードマップの読解等）と接続できるよう、物語の舞台を具体的な地名で明示する構成とした。また、視覚表現については、航空写真や浮世絵「東海道五十三次」等の資料をもとに土地の特徴を整理し、図案を検討したうえで、静岡県在住のイラストレーターであるマツナガマサエ氏に制作を依頼した。駿河湾や久能山といった静岡の名所を物語の中に配置することで、視覚的にも地域性が立ち上がるようにして、学習者が物語を架空の世界ではなく「自分の生活環境に関わる問題」として捉え直すことを意図した。また、物語内における妖怪の台詞や語り口については、恐怖を過度に強調するのではなく、親しみやすい方言や語りを用いることで、対話を促すキャラクターとして表現した（付録1）。

なお、同紙芝居の裏面には、本紙芝居および本プロジェクトの趣旨について以下の説明文を記載した。

紙芝居「なんかようかい？ぼうさい妖怪!？」について
この紙芝居は、静岡市に伝わる「稚児橋の河童」「沼のばあさん」「鹿島神社の要石」「宇津ノ谷峠の鬼」といった民話や伝承をもとに、子どもたちに親しみやすい防災教材となるように制作されたものです。日本では昔から自然災害に対する不安や恐怖を、妖怪に投影して語り継いできたと言われていいます。この紙芝居では、地域に伝わる妖怪伝承を取り上げることで、子供たちに自然災害に対する備えや知恵を身近に感じてもらい、学校や地域での防災学習につなげてもらうことを目指しています。

次節では、本紙芝居と連携した展示やワークショップ内容について詳述する。

5. 「防災妖怪学」の展示及びワークショップの企画
ワークショップの実施に先立ち、静岡市中央図書館の入口ロビーを会場として、研究室の活動展示を2023年9月18日から11月26日まで行った。本展示では、これまでに制作してきた防災教育教材の紹介に加え、「防災妖怪学」プロジェクトを中心に構成を再検討し、静岡県にゆかりのある妖怪伝承と自然災害との関連性が視覚的に理解できるよう展示内容を工夫した。展示期間は約2か月に及び、その間、多くの来館者に関覧されるとともに、本プロジェクトに関する問い合わせも複数寄せられた。写真1には、展示全体の様子を示している。



写真1：静岡市中央図書館ロビーでの展示の様子

2023年10月27日(日)に実施したワークショップは、妖怪伝承を防災教育の教材資源として活用し、地域固有の災害リスクに対する関心と理解を高めることを目的として企画された。先行研究(高田・近藤, 2019)や岩手県立図書館主催「家族と防災について学ぼう in 遠野―災害と妖怪―」(2024年7月29日開催)、名古屋市港防災センターの展示「妖と自然災害―愛知・名古屋の妖怪伝承」(2023年5月23日から8月26日開催)といった先行実践に学びながら、単なる知識伝達にとどまらず、参加者が物語的体験を通して主体的に防災行動を考えることができるよう、プログラム全体を三つの段階的な活動(ミッション)から構成した。

ワークショップの第1段階では、〈紙芝居〉「静岡に伝わる防災妖怪を確認せよ!」と題し、本プロジェクトで開発した防災紙芝居の読み聞かせを行った。妖怪伝承を導入とすることで、参加者の興味・関心を喚起するとともに、地域の自然環境や災害にまつわる物語的背景への理解を促すことをねらいとした。読み聞かせはプロジェクトメンバーに加え、図書館職員にも協力を得て複数人で実施し、配役に応じて声色を変えたり妖怪のお面を着用したりするなど、臨場感を高める工夫を行った。

第2段階では、〈なぞ解き〉「防災妖怪のメッセージをキャッチせよ!」として、クイズやワードパズル形式の活動を取り入れた。具体的には、「図書館周辺は浸水想定区域に含まれるか」「最寄りの避難所はどこか」「特定の妖怪伝承地に現在整備されている施設は何か」といった地域固有の問いを設定し、ハザードマップを参照しながら考える活動を行った。これにより、妖怪伝承と現代の地理情報や防災インフラとの関連性に気づかせ、物語と現実の空間を結びつけて理解することを意図した。

第3段階では、〈お面づくり〉「防災妖怪になって、こっそり避難せよ!」と題し、体験的な避難行動へと学びを接続した。参加者は好きな妖怪のお面を選び、着色や装飾を施してオリジナルの妖怪キャラクターを

制作する。この過程を通して活動への親近感を高めた上で、図書館内の避難経路図を用いた避難行動の学習を行った。避難経路図には「河童」「鯰」「鬼」などの妖怪アイコンを用いて避難ポイントを示し、例えば「『鯰』の場所で地震が起きた場合、どのように行動するか」といった問いかけを通して、状況に応じた判断を促した。

このように、「妖怪になってこっそり避難する」という物語的設定を導入することで、通常の避難訓練とは異なり、参加者が注意深く、かつ楽しみながら災害時の行動を考えることができる学習環境を構成した。本ワークショップは、〈物語〉〈地図〉〈行動〉を段階的に連動させることで、防災知識の理解と実践的判断力の育成を同時に目指した点に特徴がある。

6. ワorkshopの実施とアンケート調査

当日のワークショップ参加者は小学生13名であり、内訳は1年生1名、3年生6名、4年生3名、5年生1名、6年生2名であった。募集対象は3年生以上としていたが、兄弟での参加により1年生が1名含まれている。運営には、静岡大学の学生4名、図書館職員2名、ならびにスタッフとして協力した高校生5名が携わった。保護者はプログラムには参加せず、会場内での参観という形をとった。ワークショップの所要時間は、計画どおりおおよそ90分であった。

紙芝居の読み聞かせ後に実施した内容確認のクイズでは、ほぼ全員が正答しており、物語内容や防災に関する基本的理解が概ね達成されていたことがうかがえた。続くハザードマップを用いた謎解きの活動では、参加者がチームごとに協力しながら解答を導く様子が見られた。異年齢混成のグループ編成としたことで、上級生が学校で学習した地図記号の知識を活用し、下級生に説明する場面も確認され、相互的な学びが促進されていた。



写真2：グループで謎解きに取り組む様子

また、最終段階の「妖怪になりきり避難」では、お面制作を通して妖怪への親近感が高まるとともに、避難ポイントに示された妖怪マークを注意深く確認し合いながら行動する姿が見られた。参加者は互いに声を掛け合い、館外の避難場所まで落ち着いて移動しており、物語的設定を取り入れた活動が、避難行動への集中と主体的な関与を支えていたことが示唆される。



写真3：避難訓練の様子

ワークショップ終了後に実施したアンケート調査の結果から、プログラムの理解度および学習効果について一定の示唆が得られた。まず、「紙芝居の分かりやすさ」に関する項目では、参加者全員が肯定的な評価を示しており、導入教材としての有効性が確認された。

「防災妖怪が伝えようとしている内容」についての自由記述では、「妖怪はみんなの命を守ろうとしている」「河童は水の危険を伝えようとしている」といった回答が見られた。これらの記述から、参加者が妖怪を単なる恐怖の対象としてではなく、災害の危険性を知らせ、人々を守る存在として捉えていることがうかがえる。これは、紙芝居開発の段階で重視した、災害リスクを警告する「ハザード機能」と、安全行動へと導く「セーフティ機能」が、物語を通して参加者に適切に伝達・受容されたことを示すものと考えられる。

なかでも6年生の参加者による「昔の人々の防災意識から防災妖怪が生み出されている」といった記述は、妖怪を空想的存在としてのみ理解するのではなく、歴史的・文化的背景をもつ生活の知恵として捉えようとする視点を含んでおり、防災妖怪学が目指す伝承理解の方向性と重なる点として注目される。

また、「防災について興味をもったこと」に関する項目では、「いろいろなハザードマップを見たい」「学校などの危ない場所を知りたい」「地震のときどこへ、どうやって逃げるか知りたい」といった回答が見られた。これらの記述から、参加者が災害リスクを抽象的知識としてではなく、自身の生活圏に引き寄せて捉え直し、具体的な行動（避難経路や避難場所の確認）へと関心を向けている様子が見られる。この点については、物語によって喚起された注意や関心が、

ハザードマップという可視化された媒体を介して、行動志向的な理解へと接続されたものと解釈することができる。

さらに、「楽しかった活動」に関する項目では、謎解きの一環として実施した「ワードパズル」を挙げる回答が最も多く、次いで紙芝居、お面作りが続いた。

「ワードパズル」は、謎解きの要素を取り入れることで、ハザードマップの読解という認知的負荷の高い活動を含みながらも、参加者が意欲的に取り組むことを可能にしていたと考えられる。防災学習が不安や恐怖といったネガティブな感情を伴いやすいことを踏まえると、妖怪という象徴的存在とゲーム形式の導入は、学習への心理的なハードルを下げ、動機づけを高める上で有効な手立てとなり得ることが示唆された。

一方で、本ワークショップにはいくつかの課題も認められた。発達段階によっては、妖怪に対する理解がキャラクター的な受容にとどまり、妖怪―場所―災害リスクの連関が必ずしも明瞭に把握されていなかった可能性がある。実際、妖怪伝承地に関する設問では、学年によって回答傾向に差が見られた。この点は、単なる「学年差」として整理するのではなく、象徴的理解から概念的な理解へと移行するための学習の足場を、いかにプログラムとして設計するかという課題として捉える必要がある。

今後の改善に向けては、第一に、妖怪伝承地と実際の災害リスク（浸水想定区域や土砂災害警戒区域等）を重ね合わせた地図資料を提示すること、第二に、伝承が成立した歴史的背景（麻機低地における水害の歴史、沼地での生活史、遊水地整備の過程など）を年表や写真資料を用いて可視化すること、第三に、「妖怪が出るから危ない」という因果の捉え方ではなく、「危険な場所や条件を妖怪が象徴的に伝えている」という因果関係の方向性を明確に示すことが挙げられる。これらの教材改善および内容上の工夫により、妖怪伝承を単なる物語的要素として消費するのではなく、地域の災害リスクを理解するための認知的媒介として、より効果的に位置づけ、教育的に活用していくことが可能になると考えられる。

7. おわりに

本研究は、「自然災害の民俗学的研究」（野本、2013他）の系譜に位置づけられる議論を踏まえつつ、地域に口承されてきた妖怪・民話伝承を防災教育の「知的資源」として活用した先行実践（高田・近藤、2019）に学びながら、それらを地域の災害史や生活史と結びつけたナラティブとして捉え直し、教育的活用を図った実践研究である。とりわけ、①学習者が災害リスクについて語り合い、判断を形成していく教育的過程に焦点を当てた点、②静岡市という特定地域に根差した教材およびプログラム開発を行った点、③図書館とい

う公共空間においてワークショップとして実装した点に、本研究の特色がある。本研究の分析から、参加した児童は、妖怪を単なる恐怖の対象としてではなく、災害リスクを知らせ、人命を守るための警告的・保護的存在として捉え直すようになり、ハザードマップの読解や避難行動に対する関心を高めていたことが確認された。これらの知見は、伝承が内包するハザード機能およびセーフティ機能を、子どもの発達段階に応じた学習内容として翻訳し得る可能性を示唆するものである。あわせて、こうした結果は、防災教育実践を改善・発展させていくうえで、①学習者が「危険を知る」ことにとどまらず、地域に潜むリスクについて他者と語り合いながら理解を深めていく過程、②抽象的な防災知識ではなく、具体的な場所・物語・経験と結びついたリスク認知がどのように形成されるのかという点、③教材や活動が学習者にとって「恐怖喚起」ではなく「注意の方向づけ」として機能しているかどうか、といった点に注目する必要性を示している。このような視座は、今後の防災教育において、教材構成や学習活動を単なる手順習得型から、判断力や対話を基盤とした学習へと転換していくための理論的・実践的手がかりを与えるものといえる。一方で、発達段階によっては妖怪理解が表層的・象徴的な受容にとどまる傾向も確認され、伝承と場所、災害リスクとの関係をより明確に結びつけるための教材設計が課題として導かれた。この点から、伝承の成立背景や地理的文脈を可視化する地図・写真・年表等の視覚資料を統合的に活用し、象徴理解から概念理解へと至る学習の足場をいかに構築するかが、今後の検討課題として浮かび上がった。

今後の研究課題としては、第一に、学校現場における複数回の授業実践を通じた学習効果の検証、第二に、地域間比較による伝承と災害リスク対応様式の差異の分析、第三に、防災意識の持続性や家庭内対話の誘発、さらには実際の避難行動への影響を含む長期的評価が挙げられる。伝承を媒介とする防災教育は、地域の歴史・文化・環境と結びついた学習を通して、子どもが不確実な状況に向き合い、判断し続ける構えを育成する実践である。今後も、実践と分析を往還させながら、その理論的深化と実証的検証を継続していきたい。

註 1 本論文における「ナラティブの社会的機能」とは、特定の物語や語り、事実の伝達にとどまらず、地域社会におけるリスク認知、価値判断、行動選択について人々が共有し、対話し、合意形成を図るための媒介として機能することを指す。災害に関するナラティブは、専門的知識を持たない人々にとっても理解可能な形で危険や教訓を可視化し、世代や立場を超えたコミュニケーションを可能にする点に特徴がある。本研究では、妖怪伝承をこのようなナラティブとして位置づけ、治水・防災・環境をめぐる課題を語り合うた

めの共通言語を生成する機能に着目する。

参考文献

- 朝里樹監修・高橋郁丸・毛利恵太・怪作戦テラ著(2022)『日本怪異妖怪事典 中部』笠間書院。
- 飯塚伝太郎(1956)『静岡県史話と伝説』松尾書店。
- 小川日南・藤井基貴(2024)「災害伝承と防災教育(1): 静岡市における民話『沼のばあさん』を事例として」『静岡大学教育実践総合センター紀要』34巻、56-64頁。
- 小松和彦(2013)『日本怪異妖怪大辞典』東京堂出版。
- 小松和彦(2015)『妖怪学新考』講談社学術文庫。
- 笹本正治(1994)『蛇抜・異人・木霊—歴史災害と伝承』岩田書院。
- 笹本正治(1998)「災害文化と伝承—長野県小谷村の土石流災害と伝承—」『京都大学防災研究所年報』41号B-2、63-75頁。
- 総務省消防庁「全国災害伝承情報 データベース」<https://www.fdma.go.jp/publication/database/database009.html> 2026年2月18日閲覧。
- 高田知紀(2024)『神と妖怪の防災学「みえないリスク」へのそなえ』法律文化社。
- 高田知紀・近藤綾香(2019)「妖怪伝承を知的資源として活用した防災教育プログラムに関する一考察」『土木学会論文集』75号、20-34頁。
- 千田敬二・下村博之・西村智博(2023)「自然災害伝承碑から読み解く関東大震災」『地盤工学会災害調査論文報告集』1巻2号、285-316頁。
- 千々和詩織・矢守克也(2020)「長期的な視点に立った学校防災教育の実施と検証に関する試論」『災害情報』18号、25-34頁。
- 二本松康宏監修(2021)『北遠の災害伝承 語り継がれたハザードマップ』三弥井書店。
- 野本寛一(2013)『自然災害と民俗』森話社。
- 畑中章宏(2017)『天災と日本人—地震・洪水・噴火の民俗学』ちくま新書。
- 宮本匠・渥美公秀(2009)「災害復興における物語と外部支援者の役割について—新潟県中越地震の事例から—」『実験社会心理学研究』49巻1号、17-31頁。
- 文部科学省(2001)「『生きる力』をはぐくむ学校での安全教育：学校安全参考資料」https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anzen/1416715.htm 2026年2月18日閲覧。
- 文部科学省(2012)「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議(最終報告)」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/012/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/07/31/1324017_01.pdf 2026年2月18日閲覧。
- 文部科学省(2023)「第3次学校安全の推進に関する計画について」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1415877_00004.htm 2026年2月18日閲覧。
- 柳田国男(1968)『定本柳田国男集』4巻、筑摩書房。
- やまだようこ(2021)『ナラティブ研究—語りの共同生成』新曜社。

謝辞

本研究にあたっては静岡市立中央図書館及び同図書館友の会のみなさま、名古屋市港防災センターの大場玲子センター長、岩手県立図書館の森本晋也館長、國學院大學栃木短期大学の吉村風准教授、静岡放送の坪内明美様・和田啓様よりお力添えをいただきました。記して感謝申し上げます。本研究は、科研費(23H04858)及び(24K00415)の助成を受けたものです。

付録1)『なんかようかい？BOSAI ようかい！？』紙芝居イラスト



表紙



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩



⑪